

母に捧げる物語

内田博司

登場人物 石橋多美 四十五才

時 平成元年九月〜平成二十五年十月

所 三鷹市牟礼

福岡県八女市

福岡県小倉市

武蔵野市井の頭公園

新宿区新宿御苑

国立市

福岡県水巻町

一

母の佳代が平成元年九月の定期健康診断で乳ガンと診断された。横浜の市役所は退職したがまだ再雇用期間が二年も残っているのだからいつもの母なら自分から手術を望んで後腐れの無い身体で勤めを果たそうとするのに外科では無く内科を受診していた。

「早い内なら切った方が転移しなくて安心みたいよ」

「でも痛いのもうご免だよ」

今迄押しつけがましいことは遠慮していたがまだステージ2と聞いて私は根気よく母を説得した。

「母さん聞いてよ」

「手術なんて今更やだよ」

「友達が同じ病気になったの」

「手術を嫌がって死んだんだろ、前に聞いたよ」

「そう、若かったから乳房無くしたくなかったのよ」

「私は別にそうゆうつもりじゃないんだから」

「乳ガンはね、甘く見るとドンドン他に移ってガンだらけで死ぬのよ」

「私はもう年だし遠慮してくれるさ」

「母さんは人任せにしない主義じゃなかったの」

「そうだけど」

「それなのにどうしてガンにだけは頭下げなくちゃならないのさ」

最近の母は人生に立ち向かってゆく姿勢が見られなかった。自分から引きこもるような態度が見えるのでそのことが気がかりだった。やはりガンが母の気持ちを打ちのめしてい

るのだろうか。今迄病氣らしい病氣もせずに生き抜いてきた身にはガンの宣告は辛かったと思う。そう思つて一時は内科優先に賛成していたが自分なりにガンを調べてゆくと乳ガンは転移が早く致命的になる可能性が高いことが分かった。そのことを粘り強く話した。遂に母も根負けしてようやく受け入れてくれた。そう考えるとこの頃のうち沈んだ態度は病氣のせいとは思えなかった。他に思い当たる事をそれとなく当たってみるのだが一向に噂があかなかつた。私も長い間母の庇護に甘んじてあらゆる障害除けにしてきた傾向があり、その為に随分助けられてきた。

この頃はようやく私も仕事に慣れてきて幾らかは自信が付いてきた。母には今迄出来なかつた親孝行の真似事を少しはしてみたい年頃になつたのかと我ながら苦笑いをしているところであつた。

ところがその謎が思いがけない形で解けた。工務店の社長との何気ない会話からだつた。昭和一桁生まれなのにいまだ現役で張り切っている人だから歯切れも半端ではなかつた。

「いやあ、あんた程の若さでは分からないだろうがね。世界から百五十ヶ国以上の君主や大統領が一人近くも参列したんだからさ。葱坊主を屋根に載せたような天皇の棺を収めた輿をさ二百人以上の昔の装束をした宮内省の役人が傘も差さないでみぞれの中を進んで行くんだぜ。しかもお天気まで同情して震えあがるような寒さでさあ。それを見ただけでこつちはよ涙が止まらなかつたぜ」

昭和六十四年一月七日、昭和天皇が崩御された。社長が話しているのは二月二十四日に行われた大喪の礼のテレビ中継について話しているのだった。

私は大学の建築科を卒業すると建築士の資格を取り新宿にある都市計画も扱う設計事務所ので小口の設計監理業務を担当していた。この日も二世帯の戸建て住宅を請け負つた工務店との打ち合わせで杉並の事務所にお邪魔していた。本来なら施工担当者との打ち合わせになるのだが工務店にとつても大事な面持ちでテレビに釘付けだったので私も大喪の礼は覚えていた。

「そうでしたね。あれ程厳肅に古式通り進むので正直驚きました。それ以上に街の様子が死んだように静かでビックリしました。映画館もデパートも小さな商店までシャッターを下ろしてパチンコ屋まで閉まつてるなんて。第一、テレビがニュース以外流さないし音楽も葬送進行曲ばかりでとにかくあの日は異常でした」

工務店を出ると社長とはペンディングが何カ所かあつたので帰宅の前に一旦新宿の事務所に戻つて内容を整理した。ポットに電源を入れコーヒーを湧かした。窓から見える西口は闇の中にネオンがまばゆく浮かんでいた。社長と話した大喪の礼が頭にこびりついていた。その時の母のことをしきりに思い浮かべようとしていた。そういえば母は一言も話を交わせない程体を硬くして画面に見入っていた。私自身もまるで明治の頃のような時代が再現されて進行する画面に引き込まれていたから母のことは忘れていた。そうだ。自分の気持ちにばかり集中していたので母の様子にまで気が回らなかつたのだ。だがあの時から

母は明らかに何かが変わったことは確かだった。

あのテレビで母の何かがマグマのように立ち昇ってきたのだろうか。ガンという恐ろしい病気まで飛び越す程の衝撃的な事態が現れてきたのだろうか。

駅を降りると近くのスーパーへ寄って夕食の材料を買った。母が好きなので中国産のうなぎの蒲焼きを買った。デザートに梨と葡萄も買った。母は戦死した父のことを話すことをとても嫌がるので私も父について語ることは避けていた。私は父のことをとても知りたくて昔はよく母に詰め寄ったがそれでも母は頑なに拒絶した。

「死んだらみんな仏様になるんだからいいじゃないか」

「そんなこと言ったって自分の父のこと知らない子供なんていないよ」

「お父さんはね、お国のために戦って死んだのだから神様なんだよ」

その一点張りでとうとう根負けして今迄になってしまった。その度に仏壇の前に座らされて仏壇の中の写真を見せられた。写真の中の父は軍刀を両足の前に立てて胸を反らせて笑っていた。母はその分どんな時も私の為に身を粉にして私を守る盾とも矛ともなって私の前に立ち尽くすように生きてくれたのでいつしか父のことは私の胸のなかに納めてしまった。今日、工務店の社長の感激ぶりを直に聞いてあの大喪の礼は私の年代の若者には分からない特別な感情があこの年代には渦巻いているのだと直感した。きっと母もそうした感情が渦巻いているのだ。今日は旨い食事を食べた後に果物でも食べながらじっくり日頃聞けなかった父のことをシミジミと聞いてみようと思った。

玄関を開けると香ばしい柚の香りが漂ってきた。

「ただいま」

「お帰り、いい匂いだろ」

「ええ」

「友達が水沢へ旅行に行ってお土産にうどんをくれたのよ」

「おいしそうね」

私は蒲焼きを冷蔵庫にしまった。馴れないことをすると私はいつも外されてしまう性分なのだ。今日は水沢のうどんをお腹いっぱい食べよう。

「来週の火曜日に休み取れるかな」

「ななでさ」

「信濃町の病院も良いけど手術だったら近所の大学病院も実績があるから近くにしようよ」

「やっぱり手術するのかい」

「決まってるでしょ、乳がんは転移しやすいから早くしなきゃ」

「そうかね、やだね」

「術後だって半年は抗がん剤治療があるし退院したって観察に二年は見なきゃ」

「やだね、もう生きたくないよ」

「何言ってるのよ、お父さんの身になってみなさいよ」

母にはこの一言が黙らせる一番の特効薬だった。

母は今でも父の死を理不尽だと義憤を感じている節があり、父のことに触れるといじらしい程身をよじって悲しむ時があった。ところが驚いたことに母は嫁ぎ先の石橋家には一度も夫と起居を共にしたことがないと私に語っており、このことだけでも今の私達には震撼させられる話ですけど母は事もなげに

「これが戦争なんだよ」

と多くを語りませんでした。

その為終戦後乳飲み子の私を抱えて夫のいない嫁ぎ先で暮らすようになって本当に息の詰まるような生活だったと言います。窓の一つも無い納戸のような狭い部屋で息を殺して暮らしていました。食事も野菜と漬物だけだった。それを遠慮がちに食べるので栄養の点で心配だったが乳は一人前に張ってくれ、それを懸命に頬張って乳首が痛い程乳を吸い込む私の生命力を感じるとやっと母として生きる喜びを感じたとシミジミ言っていました。

その夫の故郷である福岡県八女市には母にとって辛い思いばかりが募るのか、まだ私も行ったことがあります。ところが起居を共にしたその自然の景色にはいつも心が癒やされたのか目を細めて広がる大地の豊かさに賛嘆の声を惜しみませんでした。

朝になると私を背負いおむすびと水筒と鍬や鎌を持って裏山の坂を上りながら半時も歩いて畑に着くと私を籠に入れてトマトや茄子やキュウリの種を蒔いてゆきました。それでも一人の気兼ね無い農作業は母子だけの心弾む楽しみでもあったと言ひ、休憩の私に乳を飲ませる時がこの上も無い安らかな一時であったとなんども私に語ってくれました。

終戦の年の十二月二十九日に石橋家は床の間のある奥座敷で当主や親戚一同が集まって深刻な顔をして相談している姿が母には物凄く不安に駆られたと語っていました。暫くしてそれが第一次農地改革とかで大勢の小作人を抱えて対応に苦慮する有様がそれから何日も続き慌ただしい雰囲気在家中をざわつかせていたと言います。

そんな中でも母は相変わらずおむすびと水筒と鍬、鎌を手に私を背負って山道を畑に向かう作業を毎日繰り返していました。辛い農作業でしたが手元に私がいるのでそれは何倍にも癒やされて母は息が詰まりそうだが苦しいとは思わなかったそうです。

年が明けて昭和二十一年の暮れに母は長男から床の間のある奥座敷に呼ばれた。子供は長男の嫁が看てくれると言うので恐る恐るいままで一度も入ったことのない奥座敷にゆくと長男は母の顔を一度も見ないで天井の一角を睨みながら

「第二次農地改革の通達が役所からあって多くの土地を小作人に譲り渡すことになった、これからは農家も大変な時代になったからあんたにも行く先を自分で考えて貰いたい」

と言われた。母はポカンとしてどう答えていいのか言葉が見つからず長男の顔を見ていると長男は初めて母の顔を見て

「茂はもう帰ってこないんだし、あんたもまだ若いのだから新しい生き方をするのもあんな

たの為だ、子供が大変なら此処に置いていってもいいからあんたの身の振り方を自分で考えて好きなように生きるがいい。とにかく日本は戦争に負けてしまったのだから誰も彼も出直さなければ立ちゆかないんだからよく考えて返事をしてくれ」

そう言うとき長男は席を立てて母はひとり残り残されてしまった。仕方なく納戸の部屋に帰ってきた。この家に自分の居場所はないのかと思うとお先が真つ暗になった。

子供は置いていってもいいとまで言われた。全くのひとりぼっちだと思った。考えると言っても真つ暗な納戸では良い考えは浮かばなかった。

母はやはり私を背負い山道の畑へ行つて考えるしかなかった。私に乳をせがまれて暫く座り込んで乳を預けながら眼下に広がる雲や山を眺めていた。谷底には一本の道がずっと続いておりその横に川が流れていた。川は白波を立てて流れていた。その川は海へと続いていた。

夫もこの土地を離れて国鉄の職員になったことを考えた。戦争が無かったら穏やかな人生が送れたのに夫も此処には戻れなかった。

夫も居られないなら妻の私だっていつまでもいるわけにはゆかない。そのことを納得せざるを得ないのかと思つた。

でもどうしたら生きてゆけるのだろうかと考えたら涙がこみあげてきた。

何日も考えて多美だけは離せないと思い母は遂に実家に帰ることに決めた。

奥座敷で母は長男に挨拶した。長男は

「これからえらうことじゃが達者でな」

母が夫の家を出る時は私と風呂敷一つだけだった。門口で長男が送ってくれた。鹿児島本線の羽犬塚駅までは馬車を用意してくれた。

ギユウギユウの買い出し列車に乗って久し振りに小倉の実家に辿り着いた。

母子二人の現実実家に帰っても変わらないがやはり夫の家では一度も夫と暮らした事実が無かったため針の筵のような緊張だったが実家では羽根を伸ばしてゆつくりと休める場所があった。

祖母も私の境遇の辛さには充分同情してくれた。帰った時には大声を上げて泣きながら多美を抱いて

「大変だったなあ」

と慰めてくれた。この時シミジミと日本は戦争に負けたのだ、と母は奥歯をかみしめて思つた。

「多美を育てなければいけない」

一から出直しだと言う気持ち湧いてきた。

しかし母子二人がこれからどうして生きてゆくか、については全く思案が浮かばなかった。

毎日、私の世話に気を紛らわせて陽が暮れるのを待った。
私を寝かしつける時に気がつくとも母は夫から毎日聞かされた歌を唄っていた。

肩を抱いては口癖に どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと 言い交わしたる二人仲

夫が唄ったこの歌は「戦友」と言う歌だが母は何故かこの節しか唄わなかった。戦後を生
き抜いてきた折節にいつも母は何故か私に言い聞かせたい思い入れでこの歌を唄っていた
気がした。その気持ち痛い程伝わった。私も何かの拍子に唱和している時があった。そ
の時母は最も嬉しそうにしていた。いつか二人は泣きながら唄った。

だけどこの歌をよく考えるところでも切なくて聞いていられないほどの悲しさに満ちてい
た。私が母にそのことを問い詰めようとするとも母はいつも

「そんなことは良いじゃないか」

と言

「自分は国の為に死ななくてはならない、そのことを問い詰めても仕方ないじゃないか」

と夫からいつも言われたと母はそれ以上は語らなかった。

その姿を見ていると母は覚悟を決めて何事か引き受けている様子がとてもいじらしくて
仕方なかった。だからこの歌は二人の生きている唯一の証だった。この歌の哀調ある調べ
は母の魂に触れて響いた。

この話を娘の私になんとか打ち明けてくれたのは母に付き添って色々と入院の準備をし
ている時だったり、医師による様々な手術前の検査に立ち会って空いた時間に病院の喫茶
室で母の方からポツポツと話し出したことだった。

「ガンの手術」という非常時があれ程頑強に閉ざしていた母の心の扉を開く鍵となった。
十一月になって彼岸花が真っ赤に咲いた頃母は入院し手術を受けた。幸い患部が左外側上
部だったので乳頭を残して外観的には切除による損傷は目立たない程の出来映えで終了し
た。まだ脇の下にはリンパ液などの残液を排出するドレンチューブとリングルは付けたま
まだが病院内や時には電動補助椅子に乗って秋から冬へと移り変わる庭の景色を眺めなが
ら久し振りに母子の対話を楽しんだ。

しかしよく考えてみるとこの話は戦争中の苦しかった母の物語だった。父のことは断片
的にしか語られていないような気がした。どうして素直に父の話が出てこないのか、それ
が私にはとてももどかしかった。でもこうして途切れ途切れではあるが私の知らない母と
そして父の昭和の時代が少しずつ薄紙を剥いでゆくように分かる為にはもう少し母の心が
解けて来なければ分らないことだった。

それには辛抱して我慢強く母に寄り添ってゆくしかないと思った。

術後の経過は順調でリンパ節への転移も今のところ発見できないし大胸筋も残したので
腕の機能も術前と変わりなく一安心した。いよいよ再発防止の為抗がん剤による化学療法

を四週単位で半年間の経過観察が必要だった。母と相談しながら気長に取り組んでゆくことに母も了解するとコーヒータイムには母から昔話をしてくれた。

小倉の実家に帰って母はようやく戦後の苦しい日常のなかにも母子の当たり前の暮らしを取り戻す実感が湧いてきた或る日、天気がよいので着物をほどこいて子供の普段着を作ろうと布地を張り板に張っていたら農協に勤めている長男が慌ただしく帰って来て

「家へ入れ」

と言った。濡れた手を拭きながら上がり端に座ると長男は

「空襲で大きな被害を受けた市役所で戸籍や住民台帳の整理に臨時職員を募集しているけどお前やってみろや」

と相談に来た。

突然なので思案していると

「子供は母親にみて貰えばいいじゃないか」

と促した。その場で母を見ると

「子供はおらがなんぼでも見てやる」

「じゃあ決まりだな」

というとき長男は急いで出て行った。

話はトントン拍子に決まった。

佳代にとつてもいづれ職を求めて生計を立てねばならないと思っていたので運が開けてきた気がした。多美は庭先の日向で無邪気に土いじりをしていた。

住民台帳はまず死亡者の確認から始まった。それには医師による診断書が必要であるが空襲ではそんな手続きなど出来ないのでまず病院を訪ねては事情を話して一枚一枚カルテからリストを作っていた。そのあと役所に帰って地域別に住民台帳との照合調整を行う作業が毎日毎日続いた。

一年が過ぎた。

台帳整理は終わらなかつたが佳代は試験を受け正式に市役所の職員に採用された。一家の戸主としてきちんと生計を立てなければと必死だった。これから多美と生きてゆく為にはどうしたらいいか考えるようになった。

一番身近な存在で本家の三男である照男さんと法事で会ったことがあった。寡黙で夫に似ているところがあった。照男さんは大分県の陸軍少年飛行兵学校を卒業して鹿児島県の鹿屋基地に配属になったが特攻隊に志願し終戦で帰郷していた。年齢が佳代より二才年下で親近感が湧いていた。その照男さんが大学に受かって東京に行くことを聞いた。

佳代はその行動力に軽い目眩を覚えた。時代は急速に動いているのを照男さんから教わった気がした。市役所では職員の間で民法の改正により家制度が廃止されたことが話題になった。ことに親が死んだ時は長男が親の財産を全て相続することになっていたが改正で兄弟姉妹が平等に相続することが持ちきりになった。

佳代は夫の遺族年金を貰っているのが、そんな私の実家である富田家にいつまでも居候をしているのは肩身の狭いことに気づいた。知ってしまふことは責任が伴うことだと改めて重い自覚にへたり込みたい気持ちになった。これでは自立など程遠い話だと認識しないわけにはゆかなかった。

それと同時に女だからと色々許されていることがあった。これも民法改正で男女平等になったのだから正しくは無いのだと思わずにはいられなかつた。

佳代は考えた。

夫の家にいたときはどうにか生きてゆけたけれど納戸の暮らしも山道の畑にしろ農機具を抱えて決して楽ではなかつた。なんでもあてがい扶持で生きてゆけたけれど自分の好き嫌いななどとも言えなかつた。自己主張が出来ないことは窮屈で生きた心地がしなかつた。只生きていただけだつた。もう一度夫の家での生活に戻れといわれてももう、どんなことを言われてもあの生活に二度と戻りたいとは思わない。やはり貧しくとも自由を奪われることは何よりも辛いことだつた。

そこまで考えてから、では今の実家にいることはどうなのだろうかと思つた。親の家に寄留していることはやはり庇護されていることに変わりはないのではないか。それは自立の観点からすれば自由ではないのと同じだと気づいた。

私は今子供を抱えている。それならば子供の自立を助ける為に働くことが自分の自立に繋がるのではないかと考えた。

照男さんのことが頭に浮かんだ。公務員試験なら年齢や学歴や妻帯などに関係なく受験できることを知つた。

私は自立を求めていつそ新天地を目指そうと決めた。一年間で三カ所の自治体の受験を目指して勉強を始めた。問題集を読み込み昔の教科書をさぐつた。参考書も買った。受験が近づくと福岡で受けられる東京は別にして横浜と川崎は照男さんに為替を送つて近くの旅館を予約して貰つた。受験票の寄留地も照男さんの下宿にして貰つた。多美は母親に預けた。

九州の小倉から横浜を目指して夜行列車に乗つた。その当時乗客のなかでも女の一人旅は少なかつた。働き盛りの女が問題集を抱えて顔をしかめている姿は当時食料買い出しの女性よりもよほど奇異に映つたに違いない。

試験は東京が落ち、横浜は受かつたことを照男さんの電報で知つた。川崎は行き帰りに支障があり受験を断念した。

久し振りに多美を抱こうとすると嫌や嫌やをして母親の方に逃げられてしまった。子供はたとえ親でも何かの拍子で邪険にすると敏感に反応して拒絶されることを知つた。これからは幼くてもキッチンと事情を説明しなければならないと肝に銘じた。

新しい挑戦に疲れが出て小倉市役所に休暇届を出した。この一ヶ月間でゲツソリ痩せてしまつた。それでも暫く多美は母親に預かつて貰い下宿を照男さんに探して貰つた。照男さんも大学周辺しか知見がなく友達が住んでいる東横線の白楽という駅の近くの四畳半に

台所、トイレ付だが風呂なしのアパートを紹介して貰った。

新しい生活が始まった。

苦難に満ちた九州は忘れたいが胸の奥にしまった。泣いて離れまいとする多美の泣き顔が目焼き付いて離れないが多美を連れていては仕事に支障が生じて共倒れになると思った。それを新しい十字架として早く引き取れるように頑張るしかない。それが私の急眉の目標となった。

照男さんを見て自立、自立と心を燃やしたがやはり女にとって自立は困難な壁が立ちただかっていた。多美が私の腕にしがみついて離れまいとした時は母親が思わず引きずられて転びそうになった。やはり子供にとって母親はたとえ普段離れていても血の繋がった唯一の強い絆なのだと自覚しないわけにはいかなかった。列車が動き出して多美の手が離れてしまった時にはもう自分は鬼かと心を撲った。撲って撲って唇を思い切り噛んだ。血が流れて始めて佳代は冷静さを取り戻した。

仕事は前職の経験を活かして市民課戸籍係になった。横浜も小倉と同じく海の匂いのする街だった。隣には大きな横浜公園があり、そこを抜けると中華街になりその先は山下公園だった。耳を澄ますと船の汽笛が聞こえ、どこか異国情緒のする街だった。落ち着いたら早く多美が入学する小、中学校を市役所に近い中区の近辺に見つけて再度引越す場所を決めなければならなかった。

と言つて役所の近くでは家賃が高いので高台周辺に探さなければならなかった。結局中村川沿いの地域に限定せざるを得ないか、と考え南区の新川に決めた。

九州から出てきた子持ちやもめの新参者に相応しい場所など何処にも有るはずもなく周旋屋のリストにある一番安いアパートが新しい住居となった。子供がいるので一階の東側に窓のある流しトイレ付の四畳半だった。手頃の値段でお風呂のある部屋など東京、横浜にはなかった。それでも商店街の外れに公衆浴場を発見し思わず小躍りした。早く一軒家に住めるといいなと思つたが夢のような話だった。

休みの日には方々歩いてみたが開放的で起伏のとんだ街の姿がとても親しみ深く思い切つて出てきてよかったと安堵した。

横浜は母の私にとって人生の大半を過ごした涙も汗も滲んだ心の故郷となった。娘の多美も九州の少し血の多い気質はあるがすすくと丈夫に育ってくれ夫に似たのか建築科を出ると設計事務所働いている。

昭和二十八年、照男さんは大学を出ると司法書士の免許を取り事務所働いていたが三十一年に同級生と結婚し三十八年に独立し三鷹に事務所を開いた。

一度、母は私を連れて照男さんを訪ねた時に照男さんは井の頭公園を案内してくれた。広い池は多摩丘陵の湧き水とかで白いスワン型のボートに乗ると娘がはしゃいで一生懸命にペダルを漕いで降りようとしなかった。照男さんが

「男の子みたいだな」

と感心してくれた。母は嬉しくなつて

「この池が気に入ったから此処等辺りに中古住宅ないでしょうか」

と言ったらビックリして照男さんは出しかけた言葉を呑み込んだ。

「お願いします」

と言ったら二度驚いて「本気なの」と聞いた。母はにこやかに笑って頷いたら三度驚いた。その話を後年聞いた私は母に

「叔父さんに挑みかかっているみたいね」

「どうしても照男さんに女の根性を見せたかったのさ」

「本気だったの」

「いやあ、冷やかしの積もりだったんだけど余りにも町の姿がよかったのとお前を褒められてつい口から出てしまった」

それから二十四年経った。忘れた頃に照男さんから掘り出し物があると電話が来た。

昭和四十五年、私まで自分たちの家という途方もない夢につられて一緒に連れ出されてしまった。母はうれしそうだった。そんな母を私は今まで見たことが無かった。さすがに池の周辺は高くて手が出ないがその町から川の畔を歩いて行くと池の終端にぶつかかった。牟礼という町だった。

小さな庭もありこじんまりとして玄關に槓が植わっていた。私も思わずローンを組んでお金を出すと言った。母も決心して遺族年金で貯めた貯金を使うと言った。

ここまでが母の時々に話してくれた話の断片だった。

二

平成二年の二月に母は乳ガンの手術をした。手術は成功したがその後の化学療法治療中はお定まりの副作用があり高齢の母には辛い日々だった。でも持ち前の耐え忍ぶ能力を発揮して傍で見ているも健気に一つずつ克服してやがて脱毛した頭もシッカリと新しい発毛があり私は安堵した。その後の経過もよく二ヶ月に一度精密検査に通っているが転移の兆候はなかった。再雇用の期間があと一年近く残っているが私は

「もう辞めて楽になったら」

「何言ってるの、お父さんのこと考えたらそんなこと出来ますか」

母子の間で父をだしに使うとノーサイドになる習慣がいつの間に出て来ていてそれでもしつこく父のことを聞きだそうとしても相変わらず亀のようになって答えてくれなかった。

休みの日には一人でも川縁を歩いて井の頭公園まで散歩に行けるようになったので私も安心して仕事に専念できるようになった。改築現場での指示が立て込んで検査対象が錯綜してくると熱いコーヒーを飲んだ時にフトあの歌を口ずさんでいた。九州の山間の畑に座って母と二人乾燥芋など食べながら母が唄っていた歌だった。

肩を抱いては口ぐせに どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと 言い交わしたる二人仲

私はこの歌を子守歌のように聴いて育った。大きくなって唄いながらこの詩を考えてみると少しも子守歌には思えなかった。だがメロディは実に哀調を帯び悲しい調べに涙すら出るときがあった。そうすると母がどんな気持ちで唄っていたのか分かる気がして母の負っている悲しみがどれ程深いのか思わず母を抱きしめたくなる時があった。

母は何故かこの一節しか唄わなかった。なんで他を知らないの、と聞いた時があった。母は父がこれしか教えてくれなかったと言った。そうするとなおさら父は何故この一節しか教えなかったのか謎はますます深まってくるのだった。この闇こそ父と母が抱えていたもつと広く深い底知れない悲しみが横たわっていることを私は感ずるのであった。母は父のことを戦死したとしか言わない。そしてそれ以上については頑なに拒絶するので我が家では戦争の話は禁句となった。

父の写真はアルバムもなく只一枚仏壇の奥の小さな写真立てに収まっているだけだった。私は母のいない留守に仏壇から取り出して窓辺に寄りよく眺めるのですが軍刀を身体の前に立てて穏やかに微笑んでいる顔は柔和で凛々しくも見えました。私はこの写真が好きです。だって私の父ですし私が接し得る唯一のものだからです。

私は父の声を聞いたこともないし父に抱かれたこともないのです。そんな娘にとって父はとても恨みがましく、そして愛おしい存在です。だから私はとても寂しいのです。物心ついた時から友達が何気なくお父さんと交わす言葉など聞く度に私は心が痛みました。この隔絶感に友達が幸せそうに話す度になおさら谷から突き落とされたような孤独感に変わって私を痛み付けるのでした。しかし母を思うとやはり母は私より更に深く傷ついているのではないかと母を労りたくなります。母はそんな時わざとなんとも動じない素振りをするのが余計に痛ましく私のことより母のことが気にかかるのでした。

瘦せた母の細い肩を見ていると私が男であればよかったのに、と思うことがあります。寂しげな母を軽く抱き上げて空中に舞い上がらせたならどれ程か気が紛れるでしょう。

そんな時急にあの手がかじかむ程寒く曇りが降り注ぐなかを厳かに行われた昭和天皇の大喪の礼のあの時代があった葬列の姿が浮かんでくるのです。

新宿御苑での二十一発の弔砲で始まった儀式は棺を収めた葱華輦を黄旗、白旗の十本の旗を立てて二百二十五人が葬場殿にまで運んだ。国内の要人を入れた幄舎の他にもう一方の幄舎にはベルギーの国王夫妻、イギリスのエジンバラ公、ブッシュ大統領はじめ九千八百人の賓客が招かれて参列した。この日東京の気温は三度四分平年に比べ異常な低さの中を礼装した要人、ヨルダンのフェイン国王はスーツのまま何度も側近が差し出したコートを手断って礼を尽くした。

そんな光景を母は身じろぎもせずに見入っていた。私も声を掛けられなかった。この日は一声も発せず二人して夕食を囲んだ。

夫はただ野末の露と消えたまま遺骨すら帰ってこなかったと聞いたがこの時唯一母がポロツと口走った言葉が今でも頭から消えない。

「天皇陛下が死んでしまったらもう取り付くシマも無くなってしまった」

母は何かを天皇陛下が生きているうちにして貰いたいことがあったのだ。私は執拗にその意味を問い詰めたが母は顔を埋めたまま首を振り続けたきり頭を上げなかった。

母は声を押し殺して泣いていた。

私にはもうどうすることも出来なかった。

この時の母の心中は母自らが封印してしまいたいどんな鍵をもっても開けることはできなくなってしまうた。

かくゆう私は小、中学、高校と横浜市内の学校を卒業し大学の工学部で建築を専攻した技術屋で都内の都市計画と個人住宅も扱う「現代企画」の社員として働いている。私は母が唯一父から渡された占領地で使用した品を譲り受けていた。それは父が鉄道敷設と思われる軍役で使用していた時のレールを切り取った切片を記念に貰った。これは私の宝物でなんども手に取って文鎮として使っているが、これが建築にどこかで結びついている気がしている。母は半年の病欠を経て再び働き出したが働いている方が体調にもよいことは顔色で分かった。これから先は身体と相談して余生を楽しんで貰いたいと思っている。

私は大喪の礼以来今迄以上に父のことが気になって仕方なかった。母の頑くかな拒絶ももしかしたら私への配慮があるのかも知れないと考えた。そうするとなおさら父のことを突き止めた衝動に駆られた。と言って具体的に調査するという程煮詰まった気持ちにはなかった。仕事もこのところ立て込んでいてその暇はなかった。そんな時会社から国立市中にある住宅のリフォームについて相談に乗ってくれないかとの職命があった。今迄会社として改造のような仕事を請け負った例がないので不思議に思った。そんな時社長から

「会社として特別な恩義を受けた人だから頼まれてくれないか」

と言われた。それも嬉しいが国立と聞いて桜が有名なので一度は行ってみたいと思っていた。四月になって国立市へ行った。案の定駅に降りたら目の届く限り道路の両側は満開の桜だった。匂い立つような春の空が広がっていた。思い切り深呼吸をした。依頼された今泉武生邸は一橋大学の先にある広大な邸宅だった。若奥様が出てきたがやがて案内された書齋に陽に焼けた元気な老人が現れた。自ら八十五才と名乗った。主旨は書齋にベッドとテレビを見る空間とその分隣に書庫を建てて欲しいとのことだった。庭に出てみると巨大な赤松が五本も植わって芝生には午後の陽が射していた。隅には池が在り大小の石で囲われ二百坪はある邸宅だった。注文はお定まりの内容だが既存の家と調和させるのに工夫が必要だと考えた。人生の余後を楽しむ「慰楽」と「医療」と「食用」が共有される部屋に書庫には車椅子でも移動できる空間と書棚は「安全」と「効率」を有し介添人の補助も可能な頑丈な作りをしたいと申し出ると「よさそうだね」と言ってくれた。それにしても若いのに老人向きの配慮が出来て「身内にそんな人がいるの」と聞かれた。

母のことを話すと「道理でリアルな設計だ」と褒められ一寸嬉しかった。

「ご婦人に悪いがお生まれはいつですか」

と突然言われた。素直に答えると

「そうすると貴女のお父さんは戦争に行っていないの」

「いえ行ってます。戦死しました」

「では何時死んだの」

と思いがけず突っ込まれて気分を損ねた。するとすぐ察して

「ごめん、ごめん」

と謝った。

謝られて恐縮して正直に答えると今度は黙り込んでしまった。

「お気を悪くされて申し訳ないが、ちと昔のことを思いだしてしまってね悪かったね」

と、また長い間無言が続いた。するとそれを聞いて私の方が仰天してしまった。私の返答にそれ程老人が沈黙する程の驚愕の事実が隠されているのかかえって私の方が聞きたくなかった。

「あの」

「うん」

「私の返事にそれ程驚かれる事実なんてあるのでしょいか」

「うん」

「それなら私の方こそ聞かせて頂けませんか」

「そう」

又暫く沈黙があつて

「貴女のこととは今始めて聞いたことだから私の経験と合致するとは思わないのだが色々重なるような気がしてね、だから貴女が聞きたいんなら聞いてくれるかな」

「はい」

私はドキドキして思わず身構えて一言も聞き漏らすまいと緊張した。

「貴女のお生まれも希だがお父さんの死も希だね。でもこれは勝手に自分のことを話すのだから決して貴女達のこととは思わないでね」

前置きが長いので本当に緊張してしまった。

「私は戦時中厚生省の役人としてフィリピンのルソン島に派遣されていたんだが丁度山下奉文第十四軍司令官がマニラから追われて北部のキアンガンという所で降伏した時一緒に

いて捕虜になってしまったね、彼は処刑されたが私はその後刑の途中で放免されて帰国したんだがフィリピンでは五十万の日本人が死んだ。同時にフィリピンの人も百万人も死んでしまった。あの戦争は耐えがたい思い以外にないね」

と言って絶句した。私の頭は戦場のいろんな場面が錯綜してまとまりが付かなかった。

「お母さんはお父さんのこと何と言っているの」

「詳しいことはまだ聞いていないんです」

「そう。そして貴女のお生まれだけどその年の日本男子の七百万人はなんらかのかたちで兵として徴用されていた筈だから日本にいた男子は軍需工場で働いていた人間以外ないことになるんだが」

「(多美、黙する)」

「僕でさえ戦地で戦っているんだからね」

「(多美、黙する)」

「お母さんはきつと貴女を気にかけて黙っているんだと思うね。そうだとしたらもうお母さんから聞きだすのは酷だと思おうよ」

「(多美、黙する)」

「後は自分で調べるんだね。お父さんは国の為に戦ったのだからね。防衛庁の研究所とか、国会図書館とか、調べる気ならある筈だよ」

「はい」

「そんな貴女にここをやって貰うのは何か縁があったんだね」

「有難うございます」

「宜しくね」

「はい」

思わぬ展開に足が震えていた。広い街路に出た。年期の桜と銀杏の樹が両端に植わっていてその並木が三角屋根の国立の駅から谷保の駅の方まで続いていた。歩道のベンチに座った。

もう普通に歩けなかった。驚愕の事実だった。母は何を隠しているんだろう。今泉さんは私の為だと言った。私の為に母は頑なに隠していると。しかも本人には聞くな、とまで言われた。

普通の当たり前で何も知らず、何も疑わずに生きてきた。こんな小さな人間と人間の間に何んだか巨大で不気味なものが挟まっている。

桜の花びらがハラハラと落ちてきた。見上げると高い桜の樹から花びらが涙のように落ちてきた。とてつもなく無力感に襲われた。

私は立ち上がると駅に向かった。満開の桜に行き交う人々はどこか華やいで話し声が絶えなかった。駅前のロータリーも桜の円環のように花で溢れていた。途中古びた昔ながらの酒屋があった。私は吸い寄せられるように入った。酒好きの友人が広島「白牡丹」は辛口で喉越しがスツキリする、といったのを思いだしていた。そこで四合瓶を買った。

家まで遠かった。

玄関を開けると「おかえり」といつもどおりの母の声が帰ってきた。黙って四合瓶を食卓に置いた。

「おや、なんて気が効く子だろう、マグロの中落ちが買ってあるんだよ」

母は昔の機敏さはなくしたがそれでも手際よく食卓に食材を並べた。

「熱燗にするかい」

「今夜は冷やがいい」

「おや、どうしたのさ」

私は透き通った水割り用のグラス二つに白牡丹を注いで一つを母の前に置いた。そして

「固めの杯」

「おや、どうしたの」

肩を抱いては口ぐせに どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと 言い交わしたる二人仲

私が唄い終わるとグラスを一気に飲み干した

母は涙ぐんでいた。そしてグラスに口を付けた。

「今日の国立の今泉さんはフィリピンで山下奉文司令官と一緒に捕虜になったんだって」

「(母、黙する)」

「山下司令官の死んだ日は昭和二十一年二月二十三日だよ」

「(母、黙する)」

「お父さんも昭和二十一年」

「もうやめとくれ」

母は泣き崩れた。私は駆け寄って肩を抱き寄せた。今泉さんから母を問い詰めないでと言われていたけどどうしたらいいかなんて判断がつかなかった。国立で思わず「白牡丹」を買った時から今迄の長い年月の疑問が解けるとそれはひとえに母が負ってきた辛い重荷にすぎなかった。それなら何故私にも分けてくれなかったの。

と同時にこんなことは一人の女に背負わせることではない、と怒りが湧いてきた。

「これだけは自分が墓場まで持って行こうと思ってた」

母はやっとその時のことを話してくれた。昭和二十一年のことだった。

「山の畑でいつも通り畑を耕していると、義母がハアハア息を切らせて早く家に戻れと言

ったので子供だけ抱えて戻ると厚生省の人が待っていて石橋少尉はシンガポールのチャング刑務所に収監され極東国際軍事裁判で人道に対する罪で死刑となり八月二十二日執行されました。遺骨は拒絶されました」

私は思わず怒りを発した。母がビクビクして私を見た。

「戦争をしているのに人道の罪って何なの、それに遺骨まで返さないってそれこそ人道の罪じゃないの。ルールを作って戦争することこそ馬鹿げているわ」

翌日私は会社に電話した。

「施主の依頼で調べ物があるので寄り道をして直接施主の家にゆきます」

と伝え永田町の国会図書館に向かった。

概要が分かった。市ヶ谷で行われた裁判は「平和に対する罪」で連合国七カ国で行われた。日本兵五千七百人に対する裁判は「戦中における罪」と「人道に対する罪」だった。

正確を期した裁判は昭和十八年二月のシンガポールにおける華僑掃蕩作戦で下命した上官の少将と中佐が絞首刑となり部下の憲兵だけは終身刑となったがそれでも作戦を企画立案し現場で指揮した参謀は刑を免れていた。その後の裁判は証人となった元捕虜の証言だけが重視され、直接捕虜を管理した下士官や兵士が絞首刑となり下命した上官は刑を免れていた。捕虜を使役に使いながら食糧も出さず医薬品すら使わせないのは人道に対する罪と言うが、食糧や医薬品が足りないのは軍上層部の兵站部の責任であり決して兵士の責任ではないのに「人道の罪」で兵士が絞首刑になっていた。更に強制労働で罪を問われた下士官は捕虜虐待で絞首刑になったが、よく調べると大本営が作戦遂行上どうしても鉄道敷設の工期短縮を下命し、命じられた下士官が完遂を目指して捕虜を叱咤したことが下士官の絞首刑の原因とされていた。軍隊は上官に対する絶対服従の縦の組織であり逆らえば直ちに反逆罪で銃殺されるのが正しいとされる社会なのに下命した上官に罪はないとするこの裁判こそ人道に対する罪に値し、ただ戦勝国側の感情的意趣返しになっていた。

あと、私の誕生問題だが泰緬鉄道の記録によると昭和十八年夏から秋にかけて国内の採炭能力向上の為タイ、ビルマの鉄道施設に従事していた外国人捕虜千二百人を移送し門司に入港し福岡の炭鉱で採炭の使役に使った記録がありその時の移送責任者として軍人が指揮に当たっていたと記されていたが父の記録はなかった。

早速今泉さんに調査の報告に行った。今泉さんは

「よくやったね」

と奥さんに熱いコーヒーとケーキを命じた。

「あの戦争は無謀としか言いようのない戦争だったのだよ。日本の原油生産高は昭和十五年で三十万キロリットルに対しアメリカは実に日本の六百五十万倍の生産高で、しかもそ

のアメリカから日本は八割以上も輸入していたんだからねえ、世界に誇る戦艦大和だって石油がなければ動けないんだから。結局日本は世界と平和的友好関係を築く以外に生き延びる術はないんだよ」

それから神妙に父に対するお悔やみを述べた後

「ああした、どさくさの時にはうまく刑を逃れた人は一杯いたのにきつと貴女のお父さんは真面目で几帳面で融通の利かない人だったんだね、でも決して人を恨んではいけないよ、結局は戦争が悪いんだからね」

と言ってから母のことに触れた。

「お母さんはよく頑張って生きてきたね、あなたはお母さんにお礼を言わなきゃね」

と慰めてくれた。そんなわけで工事は順調に進み国立の樹間に蟬の声がしきりに鳴く頃無事に完成を迎えた。今泉さんは上機嫌で多美にお愛想の積もりで大喪の礼の時のイギリスの新聞記事を披露してくれた。

「元日本軍の捕虜だった人が戦時中日本軍は天皇に忠誠を誓っていたと天皇の責任を追及すべきと告発した記事に対し元駐日大使だった人が天皇は戦争は賢明な選択ではないと軍に進言したが立憲君主として政府の助言には従わざるを得なかったと述べていたよ」

いかにも今泉さんらしい見解だと多美は思った。だがまだ多美の頭の中には国会図書館での資料に埋もれて懸命に調べていた時の興奮が残っていた。一瞬今泉さんにどうしても質問してみたい事があり、その答えを聞いてみたい衝動に駆られた。

今泉さんもそのことに気づき

「どうしたの」

と尋ねてきた。多美は思い切って声にだした。

「あのう、今回図書館で調べていて異常なことに気がついたことがあったんです」

「へえ、どんなこと」

「インパール作戦とか硫黄島でも沖縄でも兵隊さんが死ぬ間際にお母さんって叫ぶ時と天皇陛下万歳と叫んで倒れてゆく場面に何度も巡り会ったんです」

「それはね、戦時中日本は大日本帝国憲法によって統治されていたからその第十一条に天皇は陸海軍を統帥す、ってあってね軍隊は兵士の訓練に必ずお前達は陛下の赤子だから鉄砲一丁と同じに皆んな陛下のものだから命を粗末にするなって厳しくすり込まれていたからなんだよ」

「そうだったんですか」

多美は考え込んでしまった。

「どうしたの、石橋さん」

「はい、それで思い出したことがあって」

「どんなこと」

「はい、この間の大喪の礼の時に母が思い詰めて言ったことがあるんです」

「ほう、どんなこと」

「天皇陛下が死んでしまったらもう取り付くシマも無くなってしまった」

「なるほどね」

「私その意味が分からなくて何度も聞いたんですけど」

「うーん、それは僕にも分からないな、本人じゃなければね」

「そうですね」

「でもお母さんにとっては生涯にわたる大問題なんだろうね」

「はあ」

「とにかく戦争がもたらした大きな課題なんだろうな」

「そうですね、これは母一人が抱える事では無くて国全体で考えることですよね」

「そうかもしれないな」

「よく分かりませんが、でも天皇は古事記以来日本の歴史と文化に深く関わってきたので、これからは絶対に政治には関わらないことにしなければ日本の伝統は守れなくなりまよね、それと極東国際軍事裁判はあくまで戦勝国側が益する一方的な裁判で敗戦国側に公平な裁判ではなかったですよね」

と言うと

「その通りだよ、あの時既にアメリカとソ連の資本主義国と社会主義国との熾烈な覇権争いが起きていたから裁判は歪められていたんだよ」

「それならば新しく生まれ変わる日本は日本自身の手での戦争の原因と責任を追求し、その上で新しい日本の仕組みについて国全体で論議すべきですね」

「その通りだ、おじさん達の失敗を君達が君達の手で取り戻して欲しい」

「わかりました」

今泉さんはそれから大喪の礼のイギリスの新聞を多美に手渡すと

「しっかりと頼んだよ」

私は父に対する溢れんばかりの感情を抱えたまま帰路についた。母にも優しくしたかった。

スーパーに寄り魚屋で母の為に大きな鯛を私には小さな鯛を買った。玄関を開け「今日のオカズは鯛だよ」と差し出した。

「まあ、どうしたの」

「施主さんに良い仕事だったと褒められたから」

と、御飯を食べながら一部始終を話した。

母は聞いていて途中で箸をとめ顔を蔽って泣いた。私も箸をとめた。

長い間泣いた後母は顔を拭って

「やっとあなたに本当のことを話す時がきたね」

と改まった。私も座り直して母を見つめた。

「私は学校を卒業すると軍需工場に勤労働員に行つてた時、実家の祖父が夜やって来てこの家は男子がいらないからお国に奉公出来なくて悔しい。だから佳代にはこの家のご奉公として軍人の嫁に行つてもらいたいと切り出した。事情が分からずキョトンとしていると実は今極秘の密命で福岡の炭鉱に敵国の捕虜を千二百人ばかり引率してきた陸軍少尉さんがいるんだわ。この人は九月には又占領地のビルマに戻るのだが三日間だけ実家に来るそうなの。それなら家に帰つても埒もないから水巻の旅館を三日間借り切つて祝言を挙げよう toward 向こうの父親から相談に来たわけさ。そこで佳代に白羽の矢が立つて父も母も本家の言うとおりの意見など聞かれもしないで承諾してしまった。馬に乗せられて旅館で待っていると軍刀を下げた石橋茂がやって来て紋付き袴に着替え私も晴れ着に着替え神主に祝詞をあげて貰つて三三九度の杯を交わしたら一斉に皆は引き上げていった。残った二人は料理を食べた後女中さんに案内されてお風呂に行き帰つてきたら布団が並べられて後は広い旅館に誰も居なくなつてしまった」

急に茂さんが

「この歌は満州の歌だけど二人にはピツタリの歌だから寂しい時はこの歌を唄ってもらいたい。俺もビルマに帰つたら夜には必ずあんたも思いだすからね」

と言つてあの歌を唄つたのさ。なんでこの歌を唄つたのか、茂さんは本当はもつと自分の事を話したかと思ふの、だけど軍人だから泣き言をたとえ嫁にも話してはならないと覚悟を決めてしまったのね、顔の表情を見ていると言葉とは違う色んな複雑な思いが私にはピリピリ伝わってくるのに心で止めているのね、だから私は本当のこと話してと何度も信号を送つただけどその信号が来る度に茂さんはなおさら軍人の殻に引きこもつて心を隠してしまつた。なんとやつても私達には三日しかないだもんね。それがとつても辛く悲しかったわ。とうとう三日三晩私達は一步も旅館を出なかつた。旅館の人達も食事と着替えを廊下に置いていく以外顔を合わせないようにしていた。ラジオも新聞も見なかつた。軍隊に関する話も話せないから互いに何を話して良いか分からなかつた。只ひたすら互いに縫るように抱き合つて過ごした。子供の頃の話は盛り上がったけど三日目の朝がとう

とうやって来て「じゃ、元気でな。家の者ともうまくやって欲しい」と言うのと最敬礼をする階段を降りていった。

私も慌てて後を追うと迎えの車が来ていて運転役の兵士が最敬礼をして立っていた。何も出来ずに立っていると茂さんに乗せた車はアツという間に視界から消えてしまった。

私達の結婚生活はこのたった三日間だけで終わってしまった。後は何も無し。こんな結婚なんて余りにも残酷だと思っていたらあなたを身籠もっていたの。

「辛い人生だったわ」

「母さん」

「でもね、あんたがいると辛さを忘れたわ」

「母さん、本当に有難う」

肩を抱いては口ぐせに どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと 言い交わしたる二人仲

完

母に捧げる物語

梗概、母は定年後の再雇用二年目で乳ガンになった。多美は嫌がる母を説得して手術を承諾させた。転移を恐れたのとこの機会になんとしても父の事を知りたかった。娘として当然なのに何故か母にはぐらかされてきてしまった。多美は建築士の資格で設計事務所に勤めていた。ある日社長から特命を受け施主に会った。書斎の改築に安全と効率を図った企画を提案し共感を得て親しくなった。そのとき施主は山下奉文將軍が投降した時一緒に逮捕され將軍は軍事裁判で死刑を宣告され処刑の日が父の戦死と同一なのは母が君に告げたくない事情を隠しているに違いないから母を詰問しないで自分で調べなさいと言われ国会図書館で調べることにした。手術に成功し養生している母に多美は母の好きな料理を用意して調査の結果を報告した。母は身をよじるようにやっとなと真実を話してくれた。それは娘の知らない驚愕の事実だった。

